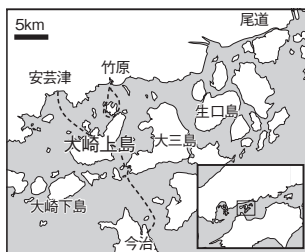


NPO法人 かみじまの風

設立一四年、 夢のあとさき

かみじまの風 事務局長 多武保 清美



大崎上島：瀬戸内海中央に位置する芸予諸島の島。面積38.34km²、周囲60.9km。人口7,507人(令和元年7月末現在)。大崎上島町は平成15年に島内3自治体が合併してできた。古来製塩集落として栄え、現在は造船と柑橘栽培を主産業に、「教育の島」としても特色を打ち出している。

かみじまの風は何をする団体か

筆者は、今年五月に特定非営利活動法人「かみじまの風」の事務局長の席に着いたばかりである。法人の存在は設立当時から知っていたが、その活動とはこれまで縁がなかった。三月を経過した現在でも、前事務局長(現副代表)の袖を引き止め何かと教えを乞うている有様である。

かみじまの風は何をする団体かと問われることがある。観光振興ですとか、特産品開発ですとか、環境保護ですとか。きっぱり胸を張って言えたらどんなにすっきりするかと思う。

かみじまの風は何でもする。してきた。海岸の清掃も、パソコン教室も、地域づくりセミナーも、バスの利用促進も、移住定住策も、郷土史料調査も、大学生の合宿のお世

話も。なぜなら、活動の目的が島づくりだから。それに通じることであれば、ジャンルは問わないのである。ここ数年は、公共事業の受託が主である。町の委託を受けて、さまざまな事業を行なう。こちらから事業の提案をすることあれば、依頼される場合もある。高田幸典大崎上島町長がすすめている町の活性化策「教育の島構想」の部会のメンバーに、代表理事と事務局長が加わっている。

他の団体の催しに協力することもある。八月一日には、「山の^{かみじま}神峰山フォーラム」のお手伝いをした。本町出身で東京在住の作家・穂高健一氏の肝煎りで始まったこの行事も今年で三回目になる。氏は近年、小説『神峰山』を世に出しており、故郷へ寄せる思いは並々ならぬものがある。主催は実行委員会であるが、事務方と当日スタッフとして参加した。大崎上島を、また、島の名峰「神峰山」の



大崎上島「山の日」神峰山フォーラムで俳句入選者を祝う穂高健一氏。

魅力を、広く知らしめたいという穂高氏の熱い思いに、賛同したということである。

事務局の体制は、事務局長（非常勤）と常勤の事務局員一人である。この二名については、ボランティアではなく給料が支払われる。そうしたのは平成二八年度からである。それまでは、事務局に携わる者も理事と同様に無報酬であった。このため、事務局の業務を責任を持って遂行することが難しく、事務所も開いたり開かなかったり、事務処理の滞りが見られたりした。平成二七年の理事会で、法人の活動ができる体制を整えるために、理事の長谷川尚道氏を事務局長とすることが承認された。長谷川氏は、東京都庁

を早期退職し旧東野町で総務課長・助役を務めたのち、広島商船高等専門学校で特任教授に就任するとともに地域連携コーディネーターとして、平成二九年三月まで概ね一〇年活躍した。これまでに夥しい数の企画書を書き、事業化を実現している。

そこから、公共事業の受託を積極的に行なうよ

うになった。折しも、内

閣府の地方創生加速化交付金を受けて、大崎上島町が地域課題解決事業を、大手事業者に委託した際、その一部を再委託されたのに端を発する。この時、

商工会の青年部と共同で遂行した課題解決事業は、町内の企業や事業所の労働者不足の解消と移住定住促進の二つを解決しようというものだった。主な事業内容は、企業のアピール力を高めるプログラムと都市の若者を仕事体験に誘うツアーの実施であり、

かみじまの風は、ツアーの実施を担った。翌年以降も二年間、その延長となる事業を提案し継続して事業を行なった。昨年度は、そのほかに広島県立の中高一貫グローバル校「叡智学園」開設に伴う親子ツアー（学校見学会）や郷土史料等調査などの事業を受託し、事業収入が一千万円を超えた。

ことの始まり。光ファイバ網敷設に懸けた壮大な夢

「かみじまの風」の法人設立は、平成一七年一月一三日で



課題解決事業「アイデアソン2019」農業編。大学生が島を歩き課題解決のアイデアを考えた。



「21世紀は農の時代」が持論。大崎上島への愛があふれる
横本正樹代表理事。

ある。その契機となったのは、大崎上島三町の合併であった。大崎上島の本江町・東野町・大崎町は、平成一五年四月一日に対等合併した。大崎上島は一つの町になったのである。合併しても人口は一人そこそこ、フェリーで渡れば三〇分程度で本土に着くというのに、本土側の市に編入という選択をしなかった。あくまで「島」としての自立を目指したからである。島のことは島で解決し未来を拓くという立ち位置を崩さなかった。

このとき、町内全域に光ファイバ網が敷設された。インターネット環境が整ったのである。横本正樹代表理事によると、これは全国でも二、三番目のことであつたらしい。そう言えば、合併記念イベントの際、町内の小学校でテレビ電話のデモンストラーションが行なわれたのを筆者も記憶している。小学校の児童が遠くの学校の児童とテレビ電話でやり取りするというのがあった。その後、町でも高齢者のサロンなどいくつか

の施設にテレビ電話が設置され、筆者が在籍していた町役場の企画課にも一台置かれていたが、あまり活用されることはなかった。たまに呼び出し音が鳴ると飛び上がって（笑）、課員が互いに顔を見合わせ譲り合う場面が見られた。自意識過剰だと笑うほかないが、顔が映ることへの面映ゆさもあつた。光ファイバ網が敷設されたからと言って新しい通信技術に、町の職員をはじめ町民の意識が追い付いていたとは到底言えない。

しかし、一部の知識人や関連業界の人々からは、その活用と可能性にたいへんな期待が寄せられることとなった。かみじまの風も、この通信網の活用を主眼として設立された。法人の定款にも目的の中に明記されている。「本会は、大崎上島をこよなく愛し、島づくりに熱い心を持った人により、光ファイバ網の活用等大崎上島の情報高度化を図る中で、高齢化社会に対応した医療、福祉サービスの充実を実現していく（以下省略）」。活動の種類は、「(1)保健、医療又は福祉の増進を図る活動、(2)社会教育の推進を図る活動、(3)まちづくりの推進を図る活動、(4)環境の保全を図る活動、(5)情報化社会の発展を図る活動、(6)経済活動の活性化を図る活動、(7)前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動」と幅広い。まるで町の総合計画を見るようである。すべてのことを行なうというより、どんなことでも対応できるよう整えておくということであつた。

當時を振り返って長谷川尚道副代表は語る。

「光ファイバ網を物干し竿として、医療・福祉や教育や環境やあらゆる分野の事業をぶら下げるというイメージ図を、僕が描いたんだよ。今見えていないことでも研究・開発して実現させよう。IT社会を島でつくる。情報発信しよう。行政のできないことを行政に協力してかみじまの風がしよう。できると思った。みんなで夢を見たんだ」

平成一五年の暮れからおよそ一年間の準備期間を経て、手続きに半年間。コアメンバーは五名。発起人の尾尻幾也氏（尾尻電機工業所有限会社社長）をはじめ、パソコン機器販

売業者、ITに詳しい広島商船高等専門学校の教授、建設会社社長、大崎町を福祉の町に押し上げた松浦真英氏（旧大崎町社会福祉協議会事務局長）と長谷川氏。行政経験が長く法律に詳しい長谷川氏が事務を一手に引き受けた。「NPO法人」そのものもまだ走りのころで、町内には一団体も存在しなかった。住民主体の地域活動団体として、何かよくわからないが、新しい画期的なことをしてくれそうと期待を託し、会員となつた人も少なくない。

思うに、大崎上島町の誕生が行政の統合であったのに対し、かみじまの風の設立は島の活性化を願う民間人の統合であった。



広島商船高等専門学校学生、公衆衛生推進協議会、木江女性会、かみじまの風とで海岸清掃。

夢は破れて

当初、光ファイバ、地域通貨、福祉などの部会が設けられた。ただ漠然と設けられたのではなく、中心となって取り組む人物があつてのことである。このほか初期から継続している事業に、野賀海岸の清掃がある。町からの受託事業で、海水浴期間の監視・管理業務を含め年四回、広島商船高等専門学校の学生や公衆衛生推進協議会、木江女性会の協力を得て清掃を行なっている。従前は、町が業者に委託していたが経費がかかり過ぎるので、かみじまの

風が請け負うことになった。これが、会費以外の収入となった。

光ファイバ網の活用に関して、視察に行ったり研究をしたりしていたところ、町の光ファイバ網は民間活用ができないことがわかった。すぐにも実現できるかと期待した遠隔医療の実施や福祉分野でのサービス充実を図るなどの夢は早々に破れてしまった。法人としてそれに代わる活動の主軸を見つけれないうちに、尾尻氏が病気で亡くなられたことも痛手だった。

ここで発案者であり、立ち上げの立役者であった尾尻氏について記してお



「交流が学び」と語る理事の中原伸悟氏。

こう。尾尻幾也氏は、自らの事業経営の傍ら商工会の有志に声をかけて旧木江町の企業誘致や雇用促進に積極的に取り組んでいた人物である。理事の中原伸悟氏は語る。

「尾尻さんは私の師匠だった。農業者が農業の世界だけに閉じこもってはいけない。

いろいろな業種の人々と交流しなければと教えてくれた。実際、私自身、交流によって学ぶことが多い。NPOの設立の時にも、農業者の力を貸してくれと言って引っぱり出してくれた」

ちなみに、中原氏は、横本代表と並んで、大崎上島で先駆的な農業を切り拓き展開してきた農業界の横綱的な存在である。柑橘の有機栽培にいち早く取り組み、独自の販路を開拓し、みかん蜂蜜を売り出し、農業者であるが商才にも長けている。近年ではオリーブの栽培を導入し、後継者の育成にも力を惜しまない。かみじまの風が行なう事業でも、農業体験と言えば、主に横本氏か中原氏の農園でお世話になっている。

迷走の時代

光ファイバ活用の夢が断たれたのちも、パソコン教室、地域通貨の導入実験、障害児の預かり合宿、空き家対策、住民対象の地域づくりセミナーや文化講演会などを行なった。宮本常一の写真展を開催したこともある。各種補助金を活用するなどしてさまざまなことに取り組んで来た。中でも空き家を借り受けて体験滞在お試し住宅とした取り組みは、のちに行政による移住体験住宅の建設につながり、法人の活動が実を結んだ事例と言える。平成二五年には広島県知事から「いきいき地域づくり賞」をいただいた。水耕トマトの栽培や大規模ないちご団地を検討したこともある。図面まで完成して実現には至らなかった。夢は湧き上がっては消え、湧き上がっては消えた。地域通貨も普及に至らず、預かり合宿も続かず、資金不足に人不足。島づくりセミナーも夢を描くだけで行動につながらなかった。ついに、セミナーはもういい、かみじまの風は何をするのかを問う声が会員からも上がるようになり、会員は減少の途をたどった。「七年前がどん底だった」と横本代表は振り返る。ボランティアは志願兵を意味すると聞いたことがあるが、余程の覚悟がないと続かない。前事務局長に、途中でやめようと思わなかったのですかと聞いてみた。長谷川氏は、しばらく考えて口を開いた。

「理由は二つあるね。一つは、町で初めてのNPO法人を

生み出した者の一人として、やめるのは寂しいという想い。もう一つは、尾尻さんが亡くなってしまったから。生前、彼の事務所へたびたび寄って話し込んでいたんだ。光ファイバ網が使えないとわかったとき、尾尻さんは言ったんだよ。それならほかの何かをすればいい。町の役に立つことをすればいいと。彼が生きていて、やめようと言えば、やめていたかもしれない。でも、町のためになることをしたいと願っていたそのひとの想いを、託されたような気がするんだよねえ」

代表、大崎上島への愛を語る

かみじまの風の来し方をみると、その時々代表や事務局長によってカラーがあると感じる。それぞれの得意分野というか、指向というか。島の活性化を目標に、活動分野を広く設けているのだから、さもありなんと思う。

横本代表は、「二二世紀は農の時代」が持論である。大学を卒業後、祖父父母の住む大崎上島へ移り住み、農業後継者となった途端にみかんの大暴落を経験する。西日本で初めて大崎上島へブルーベリーを導入した先駆者としても知られている。WWOFFの制度（※註）を活用して国内外の若者を受け入れ、農繁期の人手不足を補いつつ国際交流にも貢献している。「農業は、体はきつい（それも、やがて慣れる）けど楽しい。ここに鎧をまとう必要がないから自由だ」という。氏は、大崎上島を全国に向けて発信した

い、たくさんの人に来てもらいたい、定住者を増やしたい、と願っている。その穏やかな語り口に、大崎上島への愛があふれていると感じる。三〇年ほど前、氏が旧大崎町の町会議員であったころ、町政に協力する団体、職員がでないことをやる団体があったらと思っていたそうである。そこには「町民を巻き込んで」という考えがあったという。時期尚早であったのかその考えは実現しなかったが、現在の公共事業受託は、図らずもその思いが実現したと言っ

よい。

しかしながら、そろそろ自主事業をという思いがある。小さくとも町民が身近にそれと実感できる活性化事業が望まれるのである。

※註 WWOFF（ウーフ）…一九七一年にロンドンで設立された農業体験と交流のNGO。世界規模でつながる有機農家とボランティア（ウーフアー）とが、食事・宿泊場所と力、知識・経験を交換、持続可能なグローバル・コミュニティの創造を目的としている。

思いつきを形に。小さな試みとして

五月の初め、筆者がかみじまの風の事務所に入ったとき、相方の事務局長は長期休暇中であつた。四〇日間、カナダのプリンスエドワード島（赤毛のアンの舞台となった島である）ほかで農業研修中という。その話、個人的に興味がある。聞きたいと思った。しかし、一人で聞くのはもったいない。町民にシェアしようということになり、六月、「WWOFF

カナダ農業体験発表会」を開催した。発表は事務局員太刀掛千穂、聞き手が筆者。十数年前からW W O F ジャパンのホストである横本氏が、大崎上島でのW W O F についての話をしてくれた。五〇人ばかりの参加者の中には、あまりこのような催しに出ない人の顔がちらほら見られた。質疑応答では、会場からよい質問が次々に出て内容が深まった。町民との距離が縮まった気がした。若手の理事たちが参加してくれたのも嬉しいことだった。

一四年目の新たな始まり

課題は三つある。一つは、広報の不足。住民にかみじまの風の活動が見えていない。二つ目は、会員を増やすことととりわけ若い会員を。三つ目は、自主事業の実施。会員はもとより町の人々が共感でき、若い人が参入できること。この三つは繋がっている。さらに、経済的に団体運営が安定していないことも不安材料である。

現在、かみじまの風の活動の中心は、七十歳代である。いずれも法人設立のころから関わっている。皆、生涯現役を地でゆくような頼もしい人々であるから、当面は問題ないが、五年先はどうか。一〇年先は。創立のとき六〇歳そこそこの人も一〇年過ぎれば七〇歳を超える。これは、あらゆる活動団体で聞く悩ましい問題である。活動の継続を考えれば、若い人たちを惹きつける事業をどう展開してゆくかが問われる。若い人は個々の仕事や生活を守ることに

忙しい。法人の設立時の熱をそのまま今の若い人に求めるのは難しいように思うが、志をどう受け渡してゆくのか。法人単独ではなく若い人のグループや団体と一緒に何かを行なうのもよいかもしれない。楽しさや喜びを伴う何かを。そんなときに、さりげなく、「島の活性化って何だと思う？」と一人一人に問いかけてみたい。筆者が長く心にとどめている問いである。事務局に二十歳代の若者がいるのも心強い。こつこつと小さなことを積み上げてゆくうちに見えてくるものがあるだろう。

今年六月、総会で定款の改正を行なった。目的や活動の種類、改正は法人設立以来、初めてである。そして定款から光ファイバ網活用の文言が消えた。新たな始まりである。中原氏に問うてみた。どんな活動団体であってほしいですか。間髪を入れず答えが返ってきた。

「個人と個人の力が、かみじまの風に関わることで育ってくれるような活動であってほしい。特に若い人が」。さらに「そう言えば、ここでの学びや活動を通じて、個人の事業を發展させている人は確かにいるね。本人は気づいてないかもしれないけど。うん、そうだ。そう思う」

もつと未来へ

大崎上島を見渡してみよう。高齢社会の先をゆくが、むしろ高齢者が率先して、生涯学習が盛んである。文化活動しかり社会体育しかり。福祉のボランティア活動も地域に



大串よってみんなさい屋で、バスの乗り方教室。

根差している。若者はどうか。農業に取り組む大人の背中を見て、新たに農業に取り組む者たちがある。島の未来を考える子どもたちを育てようと起業した青年がいる。ふると大崎上島で、コミュニティデザイナーとして活躍を始めた若者の姿が見える。ものごとが生まれ育まれるには、土壌がある。コインを入れたらすぐに商品が出てくるというようなわけにゆかないのだ。

蒔かれて育たなかった種、落ちて腐った花、朽ち木や枯葉、雨水や生き物の汗、糞尿。風が運んできた黄砂、埃、草の絮^{わた}。人のこぼした涙などなど。それらが堆積し、その

土地の土壌を醸成する。やがて、花々がひらき実が実り始める。教育の成果は三〇年後と聞く。地域づくりはどうだろう。急いではないけない、と思う。失敗が無駄であつたかどうかは、ずっと先にならなければわからない。成功もまた、長い目で見ればそうとは言えないこともある。あれこれと、とりとめもなく取り組んで来たことが、いつ

しか一つのまとまりを見せつつある気配を感じる。「活性化の前に鎮静化だ」と言ったのは木次乳業の佐藤忠吉氏である（『自主独立農民という仕事』森まゆみ著）。設立以来、一貫して島の活性化を目指しているかみじまの風の活動が、またそういう人々が存在していることが、未来の島の土壌を豊かにしていることは間違いない。いかなる実果が実るかは知れないけれど。

さて、今朝のことである。横本代表が農業新聞の切り抜きを持って、事務所へ現れた。「農水省が新事業、農村活性化 企業、学生らとチーム。課題解決へモデル事業」と見出しの文字が躍っている。見れば、かみじまの風が過去二年間、課題解決事業で取り組んだものと同様の内容であった。「こっちの方が先を行つとるんじゃない！ これを言わんとっ！ 担当課の電話番号を早く！」。長谷川副代表は顔を輝かせ、電話に手を伸ばしたのであつた。



多武保清美（たんぼ きよみ）

広島県生まれ。大崎下島在住。1980年から旧大崎町職員。2016年大崎上島町教育委員会退職。2018年「ちいさい図書室」開設。2019年5月NPO法人かみじまの風事務局長。